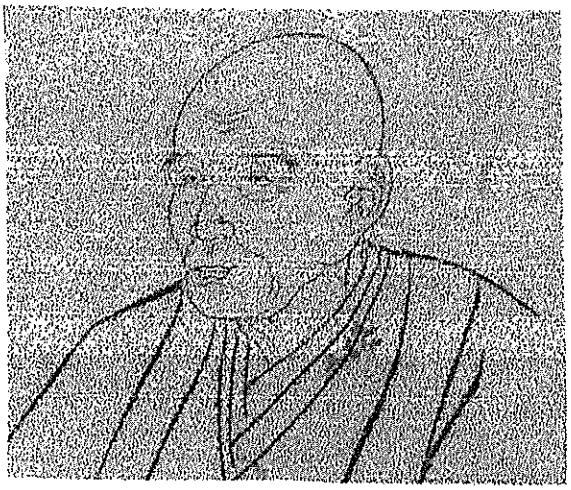
蔦重・馬琴・写楽・越谷新聞

令和７年７月７日・第７号・<馬琴の心>号・発行・旧日光街道・越ケ谷宿を考える会

○里見八犬伝の作者・曲亭馬琴も越谷に「縁」があったヒトでした。

今年、蔦重が大河ドラマの主人公になった年に、ぜひお覚えいただきたいことです。

別の号で、あの四大浮世絵画家のひとり、東洲斎写楽も、越谷に「縁」があるということを取り上げさせていただきました。写楽は蔦重が売り出した浮世絵画家で、ピカソもマチスも描けない絵を描いたヒト。世界の美術史に残る画家だと思いますが、馬琴も江戸時代に蔦重に見いだされ、あの南総里見八犬伝・98巻、106冊を28年かけ、途中で目が見えなくなった執筆の危機を嫁の口述筆記の助けを得て完成させたヒトです。この八犬伝は蔦重が脚気を患い47歳（寛政9・1797）で亡くなってから執筆されたもの（文化9・1814）。



曲亭馬琴

蔦重が生前に、これを聞いたとしたら、どういう反応をしたことでしょう。

おれの目に狂いはなかっただろう。初めて、馬琴にあったのは寛政2（1790）ごろだっけなぁ。ヤツが23歳か。これは大小説家になるだろうと一目見ただけで、思ったんだぜ～と、いったことでしょう。

新人発掘能力たるや「神技」ですからね。自信をもっていったことでしょう。

○馬琴！知っておきたいこと！

【滝沢馬琴 年表】

明和4年 (1767)	1歳	旗本・松平信成の用人・滝沢興義の五男として江戸・深川に生まれる。
安永4年 (1775)	9歳	父・興義が死去。兄が家督を継ぐ。
安永5年 (1776)	10歳	兄が出奔。馬琴が家督を継ぐ。
安永9年 (1780)	14歳	仕えていた松平家を出て母や長兄と同居をはじめる。
天明元年 (1781)	15歳	元服して左七郎興邦と名乗る。また俳人・越谷吾山に師事する。
寛政2年 (1790)	24歳	戯作者・山東京伝と知り合い交友を深める。
寛政3年 (1791)	25歳	「京伝門人大栄山人」の名義で黄表紙『尽用而二分狂言』を刊行。戯作者としてスタートを切る。
寛政4年 (1792)	26歳	蔦屋重三郎に見込まれ、手代として雇われる。
寛政5年 (1793)	27歳	履物商「伊勢屋」を営む会田家の未亡人・百の婿となる。
寛政7年 (1795)	29歳	義母死去。履物商を廃業し、文筆業に打ち込む。
寛政8年 (1796)	30歳	読本『高尾船字文』で本格的な創作活動を開始。
寛政9年 (1797)	31歳	長男・鎮五郎（のちの宗伯）が誕生。
文化元年 (1804)	38歳	読本『復讐月氷奇縁』は好評を得て、読本の流行をもたらした。
文化4年 (1807)	41歳	のちに代表作となる『椿説弓張月』を書き始める。
文化5年 (1808)	42歳	『椿説弓張月』につづき、『三七全伝南柯夢』によって名声を築き、江戸の文学界で地位を得た。
文化11年 (1814)	48歳	読本『南総里見八犬伝』の刊行が開始された。
文化13年 (1816)	50歳	恩人でありライバルでもあった山東京伝が没する。
文政7年 (1824)	58歳	神田の息子（宗伯）宅を増築。移り住み、同居。隠居となり剃髪し蓑笠漁隠と称す。
天保4年 (1833)	67歳	右眼、左眼、ともに異常をきたすようになる。
天保6年 (1835)	69歳	長男・宗伯死去。
天保10年 (1839)	73歳	両目を失明。宗伯の妻・お路が口述筆記するようになる。
天保12年 (1841)	75歳	妻・お百が死去。
天保13年 (1842)	76歳	前年に『八犬伝』の執筆が完結。この年、最終巻が刊行される。
嘉永元年 (1848)	82歳	11月に死去。

馬琴の奥さん（お百）の父は、いまの「さいたま市岩槻区末田」生まれ。母は「越谷市南荻島」生まれ。その間に生まれたのが「お百」（幼名・まさ）。そして、お百が養女に入った履物屋の主人であった養父も南荻島出身でした。

馬琴の祖父の滝沢興吉（おきえ）は、北埼玉郡川口村（現・加須市）の村長・御鳥見役の真中（まなか）治介の次男から滝沢家へ夫婦養子に入ったものです。

年表は「歴史人」167号。R4、ABCアーク刊　車　浮代・監修・文　から

○もう一つ、馬琴と越谷！知っておきたいこと

越谷吾山

忘れたら、もったいないことがあります。

馬琴が、文筆で身を立てようとしたキッカケとなったのは、5，6歳のときに、兄に連れていってもらった俳句の道、越谷吾山先生のところだったと思われます。

字が書けるか、書けないかのときに、兄の真似をして俳句を作ることが、少年・馬琴はどんなに嬉しかったことでしょう。のちに、世界的な作品である「南総里見八犬伝」を生むに至った馬琴の文学的才能は、越谷の俳句の先生によって芽生えたのです。

先生は、越谷生まれ（享保2・1717）。51歳（明和5・1768）で江戸に移り、芭蕉没（元禄7・1694）などの後の佐久間柳居の柳居派や沾山（せんざん）派（二世沾山の派）に属し、日本橋駿河町などに住んでいたようです。

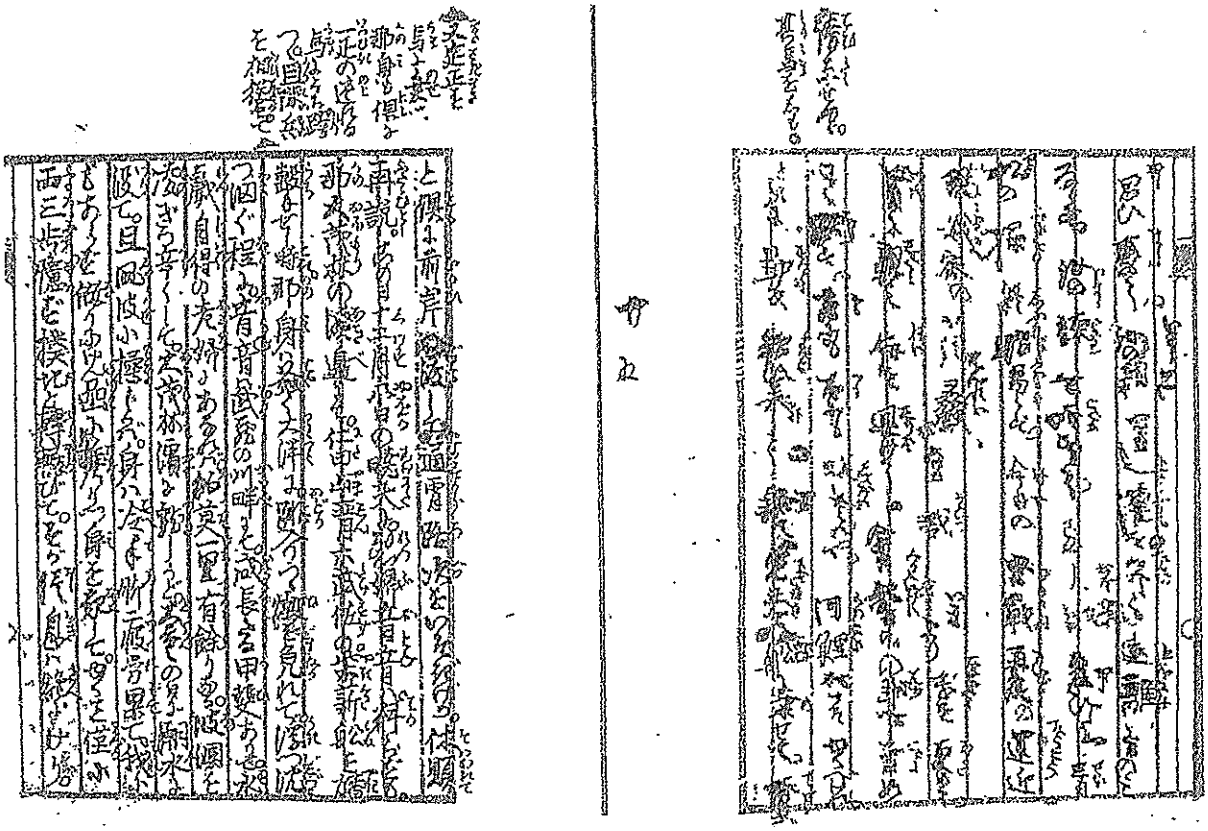
馬琴青年は吾山に「どうしたら、早く俳句が上手になりますか」と質問したこともあったようですが、先生は「日夜怠りなくしていなければいけません。その努力こそ、石をも穿（うが）つものなのですよ」と答えたようです。

越谷吾山が有名なのは、「物類称呼（ぶつるいしょうこ）」という、日本で初めての「方言辞典」を編集したことで、日本の方言学は、ここから始まったのです。これも、越谷人の誇りですし、日本のシェクスピアといわれる曲亭馬琴の文学的才能を芽生えさせた先生・越谷吾山をもっともっと、越谷のシビックプライドとして、意識しなければならないと思います。

頑張った＜馬琴＞！　やってくれた＜お路＞！　八犬伝98巻完成！

曲亭馬琴。天保4年（1833）、68歳で右目視力を失い、73歳で両眼の視力を失いました。八犬伝を書いている途中です。すでに、多くの読者が毎号、発刊されるたびに買い求めてくれている～そんな時に、途中でやめるなんて・・・愛読者の期待を裏切る悪行ではないか？　作者として絶対に許されないことではないか？　馬琴は悩みました。どうしたらいいのだろう。

まずは、何が何でも続けることだ。言うことを書いてくれるヒトはいないか。出版元に派遣してもらいました。しかし、なにしろ、時代小説。むつかしい言葉の羅列。次々に雇われては、クビ！　そして、頼みは、息子の嫁のお路（みち）へ～息子が生きておれば、文学も好きだったようで好都合だったのですが、4年前に亡くなっていました。お路は大反対。医者の娘で、読み書きは出来ても、歴史的な単語は知らず、空想にも乗れず～しかし、他の手はなく、お路は引き受けざるをえません。お路は毎日、涙を流しながら口述筆記（こうじゅつひっき）を頑張りました。そして3年後、八犬伝は完成したのです。



④　『南総里見八犬伝』第九輯（早稲田大学総合図書館所蔵）。右．が眼の悪化した馬琴の草稿、左．がお路の代筆草稿。

○お分かりください。馬琴の＜ホントの人柄＞を～

曲亭馬琴の人柄というと、«怒りっぽい、気難しいヒト»のような先入観があるのですが～　それは、どうも違うようです。

蔦のまわりの、越谷に関係ある二人の一人、東洲斎写楽については活動したのが 10 カ月、有名になり前のことも、その後のこともわかりません。どういうヒトかも分からなかったのですから、どういう人柄だったか？～わからないのですが、馬琴の場合は、毎日、日記を書いている几帳面なヒトだったので、いろいろ分かるのです。

◎妻・お百のお母さんは越谷荻島の兄（お百の）六左衛門の家で亡くなったのですが、その時、馬琴は行って葬儀の手伝いをしたとのこと。武士の生まれで、田舎の葬儀なんて慣れていない馬琴が義兄の家に出かけることも、まして手伝いすることもしないと思っていましたが、そうではなかったのです。

◎葛飾北斎というと、これも本当はどうか分かりませんが、一見したところは、馬琴に輪をかけて「筋金入りの頑固一徹」男のように思われます。その二人、馬琴が文章を書き、北斎が挿絵を描いて本を作るということが何回もあったのです。馬琴の文章に絵を描いたのは北斎が一番多かったようです。それどころか、まさに「一触即発」の二人が文化 3 年（1804）の春から夏にかけての 3～4 か月、馬琴の住まいに同居して仕事に励んだといわれています。北斎もそうですが、馬琴も心やさしいヒトなのですね。ただ、気持ちの表現の仕方が文章や絵のようにうまくなかったのですね。

曲亭馬琴とは《くるわでまこと》、「くるわでまことを尽くすヒト」と読む

〇それが、本当のように思われてきました。「元木網」とか、「酒上不埒」、「尻焼猿人」などという狂歌作家のペンネームだと軽々に済ませることではないような気がします。そんな名前をもつ馬琴はどんな生活をしていたか。日々のスケジュールは朝 6 時から 8 時の間に起床。洗面して、仏壇に手を合わせ、縁側で徳川斉昭考案の体操。朝食。茶を一服。書斎で前日の日記を書いて、執筆へ。まず、筆耕者（作家、著述家）から上がってきた前日の原稿のチェック。一字でも気になるものがあると辞書で確認。出版社からの校正も何回も行って、執筆よりも校正に手がかかる日々だったようです。

〇そして、馬琴が執筆した本の舞台は、「南総里見八犬伝」「椿説弓張月」～　海を越えるぐらいは朝飯前。空想の世界に及んでいます。いまなら、空想科学小説のジャンルがありますが、はるかな昔、遠い領域の話を、日常生活の中から紡ぎだした「くるわで、誠をささげる野暮なヤツ」の頭脳。これも、越谷のシビックプライドです。

馬琴・こぼれ話

〇馬琴のお好みは《和菓子》　まんじゅう・落雁・水あめ・羊羹など～　〇馬琴は、妻・お百のことを「愚鈍で癇癪持ちの悪妻」といっているけれど、誹謗癖のある馬琴のことだから、これは彼独特の「照れ隠し」と思われる。　〇葛飾北斎の雅号「北斎」は馬琴の「北斗七星が天上では最も強い星」の言葉から～「歴史人」167 号　車浮代監修・文 R4 から

参考：「八犬伝の作者と日常生活」真山青果著・厚生閣 1937　wikipedia から　：「方言に憑かれた男」杉本つとむ著・さきたま出版会 H 元　：「馬琴綺伝」小谷野敦著・河出書房新社 2014